

「友達と食事してきました」 コロナ療養中の認知症独居老人が発した思わぬ言葉

2022/09/18 工藤千秋・くどうちあき脳神経外科クリニック院長 毎日新聞

新型コロナウイルスの感染状況は改善してきましたが、私たちはまだコロナと付き合い
ていく必要があると思われま。たとえ感染の「第7波」が収まったとしても、冬にはイン
フルエンザとの同時流行も懸念されていて、コロナへの備えを怠るわけにはいきませ
ん。そこで今回は、私が経験した、認知症と言ってもいい高齢者のあるケースをご紹介します。
1人暮らしのこうした方がコロナに感染した場合の問題について、みなさんと一緒に
考えたいと思います。

家の中に入るとそこは……

8月上旬、私のところに地区の保健所から一本の電話が入りました。

保健所「1人暮らしの老人ですが、コロナと診断され、熱があるので、往診に行ってもら
えませんか」

保健所の話によると、この老人は、東京・城南のハイソな地区に住む80代後半の女性
とのこと。近所の医療機関で検査して、コロナ陽性と判定されたといひます。

さっそく、私はこの女性に往診を告げる電話を入れました。すると、女性はこう返して
きたのです。

女性「わざわざありがとうございます。(自宅の場所が)分からないといけないので、
先生をお迎えに行きます」

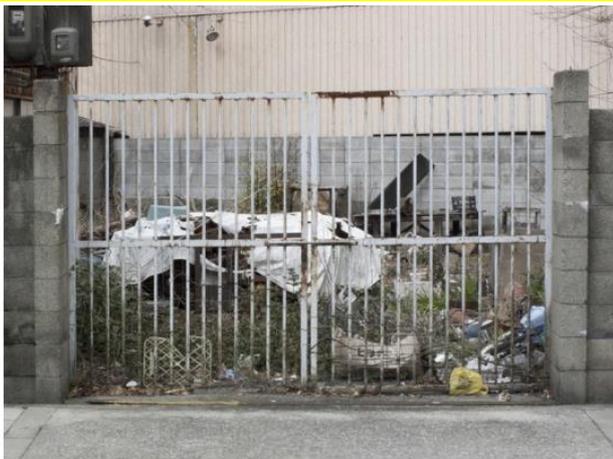
コロナに感染して発熱したばかり。体内のウイルス量も多いはずで、たとえマスクをし
ていたとしても、他の人に感染させるリスクは少なくありません。

私「とにかく外に出ないでください」

こう注意を促しつつ、女性宅へと急ぎました。

そのやりとりをした時からおかしいと思ったのですが、女性は私を迎え入れるため街角
まで出てきていたのです。

女性の自宅は戸建ての建物でしたが、庭には草が生い茂り、木は今にも倒れそうな状態



した。女性宅前で感染防護服に着替え、草を
かき分けて家の中に入ろうとしたのですが、
玄関の扉が30cmしか開きません。力を入れ
てなんとか扉をこじ開け、やっとの思いで入
ると、中はゴミだらけ。女性が横になるだけ
の空きスペースしかありませんでした。

現場でTOP-Q(トップQ)という認知症の簡
易チェック法を使って女性を調べたところ、
スコアは最も悪く、認知症が強く疑われまし
た。

空港で友人と食事?!

問題はそこからでした。

その日から毎日、私は女性宅に電話を入れました。女性は1人暮らしをしているため、
万一、容体が急変した場合に対応する必要があったからです。

コロナと診断された軽症者の場合、当時は発症翌日から10日間は自宅で療養しなけれ

ばなりません。10日間はウイルスを排出し、他人にうつす可能性があるためです。ところが、療養解除まであと3日という時に、「問題」が起きたのです。

女性の容体を確認するため、その日は午後3時に電話を入れたのですが、女性は電話に出ませんでした。3時間半後の6時半に再び電話を入れたのですが、この時も出てくれませんでした。

倒れているのではないかと……。そう心配しつつ、「必ず電話をください」と留守番電話にメッセージを残しました。それから4時間あまりが過ぎた午後10時40分ごろ。女性から私に電話がかかってきました。

女性「あの、先生。ごめんなさいね。先生に怒られると思って……」

女性「明日、羽田空港から外国に行く友達がいたので、空港まで行って、友達と食事をして、見送ってきたんです」

私「お友達にも、あなたがコロナに感染していることを伝えましたか？」

女性「いえ。言ってないです……」

接触した相手との距離や時間にもよりますが、食事を共にしたのなら、その友達は濃厚接触者になる恐れがあります。そして、そのまま飛行機に搭乗すれば、さらに前後左右の座席の人たちが濃厚接触者となりかねません。

そこからが大変です。

まず、女性はその友達がどこに行ったのか、よく知らないと言うのです。よくよく聞いてみると、午後8時くらいに、アメリカに向けて飛び立ったと答えました。

私は、すぐに保健所に電話を入れました。保健所は、どの飛行機にその友人が乗っているのか調べなければなりません。その友達と、前後左右の乗客を濃厚接触者としてフォローしなければならず、保健所は外務省にもお願いしたそうです。

話が二転三転

ところが、話はこれで終わりませんでした。

それから1時間後の11時45分。再び、女性から私に電話がかかってきたのです。

女性「先生、ごめんなさい。さっきの話はなかったことにして……」

私「えっ。どういうことですか？」



女性「先生に怒られると思って、私、ウソついちゃった」「友達がコンサートに出るから上野に行って、コンサートを聴いて、その友達と会食して帰ってきたんです」

ここまで来ると、もうどこまで本当のことなのか分かりません。彼女の生活や、話が二転三転する対応などから、一連の話は認知機能の低下から

来る「作話」の疑いが強いと判断しました。そして翌日、保健所に電話を入れて事のつづきを伝え、全てなかったことにしていただきました。保健所には申し訳ないことをしたと思っています。

そもそも、認知機能が低下した独居老人に行動制限をお願いするには限界があると思

われます。

この女性を往診して以来、毎日電話を入れ、食事がきちんと取れているか尋ねるのですが、女性は外出してコンビニで弁当を買ってきたり、レストランや食堂に出かけて食べてきたりしたと言って、私を困らせました。

私が、行政の人がご飯を持ってきてくれるので外に出てはダメですよと言っても、聞いてくれません。出かける時は、マスクをしているとは思いますが、食事をすればマスクを外すわけで、他の人にウイルスをうつしかねないリスクのある行為なのです。

国内の認知症患者は推計 600 万人

認知症の人は、前頭葉の機能が低下するため、物事の善悪の判断がしづらくなります。そのため、医師が言い聞かせたことを守ってもらうことが難しいケースが少なくありません。コロナウイルスを他の人にうつす可能性があるため、「自宅で療養して」とお願いしても、それが守られるとは限らないのです。

政府は 8 日、新たなコロナ対応策を発表しました。症状のある人の場合、発症日翌日から 10 日間だった療養期間を 7 日間に短縮。軽快して 24 時間後からはマスク着用などを条件に、短時間の食料品の買い出しなどを認めるといいます。しかし、認知機能が低下した独居の人に、こうした約束事をどこまで守ってもらうことができるのでしょうか。

考えられる対策の一つとしては、程度の軽い認知症の独居老人が感染した場合に備え、緊急避難として入れる病床を行政があらかじめ用意しておくことです。特別養護老人ホームに、いざというときに備えておくのもいいと思います。

厚生労働省によると、日本の 2020 年の 65 歳以上人口は 3617 万人で、うち認知症患者は約 600 万人と推計されています。つまり、65 歳以上の高齢者人口に占める認知症患者の割合は約 17% となります。また、18 年の高齢社会白書では、20 年の 65 歳以上の独居高齢者は約 700 万人と推計しているため、単純計算すれば約 120 万人が認知症の独居老人となります（もちろん本当の数は分かりませんが）。

現在でもこれだけの認知症の独居老人がいると推定され、社会の高齢化と共に、今後ますますその数は増えると考えられます。コロナと共存していく上で、認知症の独居老人のコロナ対策は、これまで見過ごされてきた、喫緊の課題ではないかと思えてならないのです。



工藤千秋

くどうちあき脳神経外科クリニック院長

くどう・ちあき 1958年長野県下諏訪町生まれ。英国バーミンガム大学、労働福祉事業団東京労災病院脳神経外科、鹿児島市立病院脳疾患救命救急センターなどで脳神経外科を学ぶ。89年、東京労災病院脳神経外科に勤務。同科副部長を務める。01年、東京都大田区に「くどうちあき脳神経外科クリニック」を開院。脳神経外科専門医であるとともに、認知症、高次脳機能障害、パーキンソン病、痛みの治療に情熱を傾け、心に迫る医療を施すことを信条とする。漢方薬処方にも精通し、日本アロマセラピー学会認定医でもある。著書に「エビデンスに基づく認知症 補完療法へのアプローチ」（ばーそん書房）、「サプリが命を躍動させるとき あきらめない！その頭痛とかくれ賞血」（文芸社）、「脳神経外科医が教える病気にならない神経クリーニング」（サンマーク出版）など。